

映像篇

映画文学人生論

071) 喜びも悲しみも幾年月 監督：木下恵介 撮影：楠田浩之
072) 幸福の黄色いハンカチ 監督：山田洋次 撮影：高羽哲夫
073) 忍ぶ川 監督：熊井啓 撮影：黒田清巳
074) Always 三丁目の夕日 監督：山崎貴 撮影：柴崎光三
075) 劔岳 点の記 監督・ 撮影：木村大作

一億総白痴化——テレビばかり見ていると人間の想像力や思考力は低下してしまう

私は高齢者になってから、映画鑑賞を趣味として、ほぼ一日一本のペースで観ている。このままではボケが進行するのではないかという不安にかられることもある。ボケのことを最近では認知症という。少しニュアンスは違うが、昔は似たような意味で白痴という言葉が使われていた。

映画が全盛期で、その上、テレビが普及しはじめた昭和三十年代初期に評論家の大宅壮一が一億総白痴化という言葉を流行らせた。「テレビというメディアは非常に低俗な物であり、テレビばかり見ていると、人間の想像力や思考力を低下させてしまう」という。

若い頃の私はそのジャーナリスティックな発言に影響された。白痴になっては困ると本気で心配したのである。しかし、読書にはげんでも、白痴のまま進化しない人間もあり、私がそんな人間かもしれないということには気がつかなかった。

ようやく最近になって、思い違いをしていたことがわかり、テレビやDVDで映画をよく観るようになった。活字信仰をまったく捨てたわけではないが、活字には限界があること、それに。活字を理解する自分の能力にも限界があることに気がついた。

もしかしたら映像には活字の限界を乗り越えるのに役立つ何かがあるのであるのではないかとも思う。私



映像篇

映画文学人生論

の経験によれば、これまでに観た約五十本のうち映画を観なければ、原作を読了できなかもしれないという気がするのは、樋口一葉『にぎりえ』、島崎藤村『夜明け前』、徳田秋声『縮図』、三島由紀夫『金閣寺（炎上）』井伏鱒二『黒い雨』、村上春樹『ノルウェイの森』などである。味をしめ、気をよくして、今回、映像のセンスをみがくために（？）選んだのは次の五本。

田中きよ『喜びも悲しみも幾年月』木下恵介

ハミル『幸福の黄色いハンカチ』山田洋次

三浦哲郎『忍ぶ川』熊井啓

西岸良平『ALWAYS 二丁目の夕日』山崎貴

新田次郎『剣岳 点の記』木村大作

原作を読んでいたのは『忍ぶ川』だけだが、これは原作で感動し、映画でさらに感動を深めた、映像から受けた印象が活字を読んだ経験や実際に深川を歩いた経験と重なり、感動が増幅されたような気がする。

その他四本の映画は、日本列島各地の燈台、北海道の網走から夕張までの風景と風に吹かれる黄色いハンカチ、地平線に沈む夕日、雪の剣岳。いずれの映像からも私の脳はそこそこに強い印象を受けたが、見て過ぎただけかもしれない。

赤と黄の南天の実を見て過ぎよ